

「アートに寄生された街」

A city parasitized by art

日常とアートの境界をなくし、風景が変異する。まちそのものが呼吸し、アートが共生する都市へ。

美術館へ行く道ではなく、街全体がひとつのアート体験となる。アートは建築やインフラに寄生し、日常の隙間に棲みつきながら、人々の動きや時間の流れを映り込み、変化し続ける。壁や床、ベンチや橋樑、コンクリートのひび割れや苔まで都市のあらゆる要素が「作品」として再定義される。

01 問題提起 見過ごされた「ノイズ」をアートの「宿主」へ

効率と機能性を重視する現代の生活の中で、私たちは身の回りにある「ささやかな美しさ」や、街が抱える「小さな課題」を見逃すことに慣れてしまいました。ミュージアムロードも、単なる美術館への「移動経路」として利用される中で、不揃いな歩道、古びた壁のセピ、自然に生えた雑草といったディテールはただのノイズとして無視されています。人々は、「小さな幸せ」のヒントが日常に溢れていることに気づきません。私たちが解決したい根本的な問題は、この「見過ごしの慣性」です。



そこで、アートを都市の既存の要素に「寄生 (Parasitize)」させることで、見慣れた日常を強制的に再定義します。マイナス要素だったひび割れや雑草をポジティブな鑑賞対象へと昇華し、都市の課題を遊びに変える。市民一人ひとりが、日常のどんな小さなことでも楽しめるという「気づき」と「ささやかな喜び」を発見でき、感性を呼び起こす道を目指します。

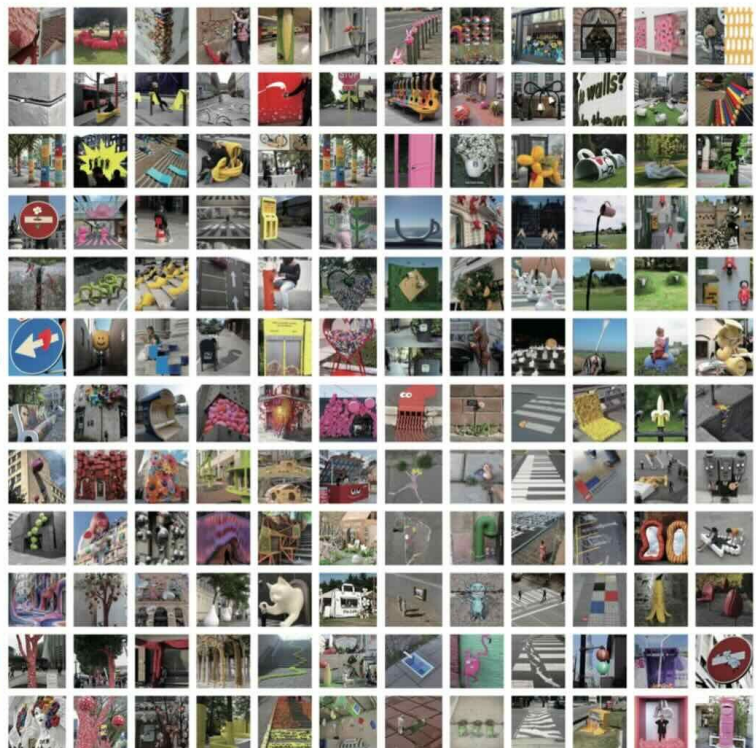
02 コンセプト 課題を遊びに変える都市デザイン

- アートは、都市の課題を解決する「機能」として働く**
- 見過ごされた「都市の裂け目」に寄生し滞留と回遊を生む賑わいを創出**
- 市民と店舗を巻き込んだ増殖プロセスで街を活性化**
- ソーラーや非常灯と一体化することで、環境配慮と安全を両立**
- 創造性と機能性が共生する、新しいサステナブルな街の姿を提示**



03 デザイン方向性

- 日常生活を作品として再定義する（寄生）
- 街・広場や環境をのく（感染拡大）
- 街・インフラ、人々へのアートを色染める
- 緑地・エネルギーと結びつけたサステナブル化
- 市民参加型で街自体が変化する制作プロセスに



文化・体験

無料の文化アクセス：誰もが無料でアクセスできるパブリックアートを通じて、経済格差に関わらず文化的な豊かさを享受できる環境を整備する
 4「育の高い教育をみんなに」
 学習機会の提供：参加型アートの制作プロセスをワークショップや教材として公開し、創造性や問題解決能力を育む学習機会を提供する
 1「仕組みがわかるように」
 インタラクティブな空間：すべての人がアクセスしやすいうниверサルデザインの参加型アート（車椅子利用者、視覚障害者なども楽しめる音や触覚の要素など）を導入する
 16「平和と公正をすべての人に」
 対話と共創の促進：アート制作を通じて、異なる背景を持つ市民同士が意見を交換し、協力を場を創出し、地域社会の結束を強める

経済・商業

8「働きがいも経済成長も」
 地域雇用と文化産業の振興：アート作品の制作、メンテナンス、イベント運営などで地元のアーティストや中小企業に仕事を発注し、持続可能な雇用を生み出す
 17「パートナーシップで目標を達成しよう」
 官民連携の強化：商業施設、行政、NPO、学校などが協定を結び、アートを軸にした持続的な地域経済活性化モデルを共同で構築する

生活・環境

4「健康をこころに」
 食とアートの融合：地域で採れる農産物や地産地消をテーマにしたアートや、食品ロスの削減を啓発する体験型作品を展示し、日常の意識向上を図る
 1「すべての人に健康と福祉を」
 ウェルビーイングの向上：日常の中にアートがあることで、歩行や散策が楽しくなり、人々のメンタルヘルスや身体活動の促進に貢献する
 1「いのちを尊重しよう」
 資源効率の高いデザイン：街灯、ベンチ、案内板などのインフラをアート化する際に、耐久性が高く、メンテナンスが容易な素材を選び、長期的な使用と廃棄物削減を目指す

地形・自然

5「気候変動に具体的な対策を」
 環境に配慮したアート：太陽光、雨水などの自然エネルギーや自然の動きを作品の動力・要素に取り込み、再生可能エネルギーへの意識向上を図る
 1「海の豊かさを守ろう」
 自然保護のメッセージ発信：神戸の山や海にまつわる自然素材や廃材を作品に取り入れ、生態系の保全や環境負荷の軽減をテーマにした作品を展示し、市民の意識を高める

観光・発信

4「文化芸術の発信を世界に」
 ジェンダー意識の発信：女性アーティストの登用や、ジェンダー平等をテーマにしたメッセージアートを積極的に発信し、多様性を尊重する観光ブランドを形成する
 1「持続可能な開発のための教育」
 責任ある観光の推進：観光客に地域文化への敬意や環境に配慮した行動（ゴミの持ち帰り、静寂の維持など）を促すアート作品や案内を設置し、オーバーツーリズムの抑制に貢献する
 17「パートナーシップで目標を達成しよう」
 国際的な発信：海外のSDGs関連イベントやアートフェスティバルと連携し、神戸の取り組みを国際的に発信し、知見の共有や交流を促進する

環境

1「気候変動に具体的な対策を」
 持続可能なインフラ：アート作品に雨水貯留システムや浄化機能、または太陽光発電や省エネルギー照明を組み込み、インフラの機能改善と環境意識の向上を両立させる
 12「つくる責任を学ぶ」
 循環型アート：地域で発生した廃材やリサイクル素材を積極的に活用したアート作品を展示し、ゴミゼロやアップサイクルのメッセージを発信する
 13「海の豊かさを守ろう」
 環境に配慮した素材：木材、石材などの自然素材を用いる場合、持続可能な認証（FSC認証など）を得た素材のみを使用し、環境負荷を最小限に抑える

教育・学び

4「健康をこころに」
 地域の緑化と学習：アート作品としてデザインされた都市菜園やハーブガーデンを設置し、農産物や食料生産に関する教育的な学びの場として活用する
 4「育の高い教育をみんなに」
 ESD（持続可能な開発のための教育）の場：アート作品のコンセプトや使用素材にSDGsのテーマを組み込み、学校や大学の環境学習や地域学習の教材として活用する
 1「仕組みがわかるように」
 イノベーション教育：学生や子どもたちが、IoT技術や新しい素材を活用したアート制作に関わることで、クリエイティブな技術開発やイノベーションへの関心をもてる

地域参加

10「人々の力を伸ばすために」
 多様な参加の促進：年齢、国籍、障害の有無に関わらず、誰もがアート制作や管理に参加できる仕組み（多言語対応のワークショップ、オンライン参加など）を構築し、社会的な包摂を推進する
 16「平和と公正をすべての人に」
 透明性とアカウントビリティ：アートプロジェクトの計画、予算、効果測定のプロセスを公開し、市民や関係者からの意見を反映する仕組みを設け、公正な運営を目指す

防災・インフラ

4「健康をこころに」
 レジリエンスの強化：アートと一体化したインフラ（非常用電源、通信設備、耐震性など）を整備することで、災害に強い、レジリエントなまちの基盤を構築する
 1「仕組みがわかるように」
 多機能な公共空間：平時はアート空間として、災害時には避難所、緊急医療支援、情報提供の拠点としても機能する多目的なアートインフラを整備する

参加型アート



- #### 部分別デザイン
- ① 既存要素への寄生アート
 - ベンチ：布アート・光のライン
 - 標識：影を使った文字アート
 - 樹木：リサイクル素材の贈りアート
 - Dび割れ：金網のアート補修
 - ② 参加型アート
 - 参加者が色や布を追加 → 感染が広がる
 - スマホで撮ると重層化するAR寄生アート
 - ③ 商店コラボアート
 - 商品を題材にした小作品
 - 店のミニ展示台
 - SNS連動で「感情の拡大」を可視化
 - ④ 環境・災害対応アート
 - ソーラードライアートや夜の導線
 - ベンチ一体型の非常灯
 - 精緻アートが日陰をつくる環境装置へ

05 感染マップ アートの広がり



感染源=既存のひび割れ・壁・植栽
 感染経路=歩道の動線
 感染進行エリア=滞留点

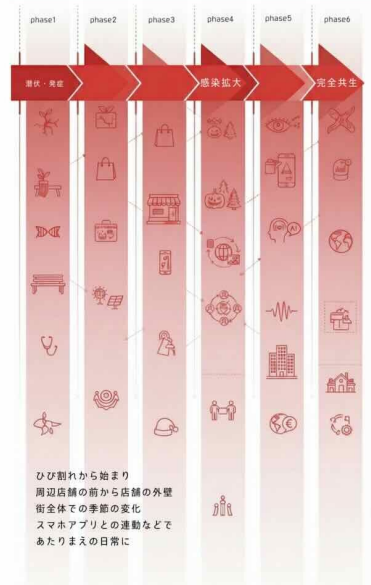


06 季節の変化



常設アートと仮設アートを組み合わせることで、街は常に変化し続けます。ハロウィンやクリスマスなど季節に合わせた装飾を取り入れることで、街全体でイベントを楽しみながらアートを感じられるようになります。

07 ロードマップ



ミュージアムロードに存在するあらゆる日常の要素がアートによって再定義される。街のインフラ・家具・植栽など「機能」がアートに変わり同時に店舗や地域の営みとも結びつく「もの」「こと」「人」がアートの媒介となり通り全体が生まれた美術館として進化する



歩行空間
 種別歩道・床・階段・手すり

立面・外装
 壁・窓・柱・ドア・レンガ

家具・装置
 ベンチ・ライト・防護柵・車止め

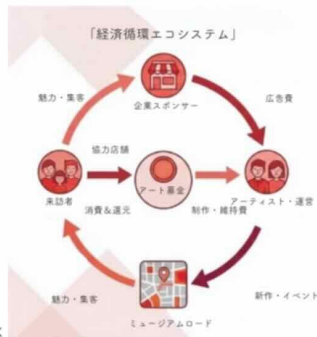
緑・自然
 樹木・植栽ユニット・緑化ユニット・遊草

生活機能
 テーブル・東屋・駐輪場・キオスク

都市要素
 標識・ゴミ箱・マンホール・公共電話

インフラ
 水路・ひび割れ

08 運営



① アート・エコシステムの構築（経済循環）

アートが街の負担にならず、利益を生み出す仕組みを作ります。
 地域還元型アート基金：協力店舗での売上の一部や、限定コラボ商品の収益を「ミュージアムロード・アート基金」へ還元。
 次の作品制作やメンテナンス費用に充てる。経済がアートを育てる循環を生む。
 寄生型広告モデル：アート作品の一部に企業ポスターや地域情報のQRコードなどを自然な形で「寄生」させ、広告収益を得つつ街の情報を発信する。

② 市民参加型「感染」プログラム（共創・教育）

市民が観客ではなく、アートを広げる「媒介者」となる仕組みです。
 「アートの種」ワークショップ：市民や学生が街のひび割れや補修箇所を見つけ、アーティストと共に小さなアートで埋めていく（＝感染させる）活動。
 リビングラボ（実証実験の場）：学校と連携し、防災アートやエコ素材のベンチなど、SDGs視点の作品を学生が制作・設置実験するフィールドとして開放。

③ 可変する景観マネジメント（維持・更新）

動きさせず、かつ安全に管理する仕組みです。
 常設と仮設のハイブリッド運用：インフラ（ベンチ・照明）に寄生する「常設アート」と季節（ハロウィン・クリスマス）やイベントで増殖する「仮設アート」を使い分け、常に鮮度のある景観を保つ。
 デジタル・ツイン・アート（AR）：物理的な設置が難しい場所や、歴史的な背景などをAR（拡張現実）で表現。
 スマホを通してアートが重層化する仕組みで、空間を物理的に占有せずにアート密度を高める。

この道は、アートの「展示空間」ではなく、人と自然、文化と日常が共存する終わりのないアート作品である
 市民が関わり、更新し続ける作品群は、10年後、20年後の街の記憶として根づいていく